

子どもの内発的動機づけを育てる条件について

—保育者の働きかけの検討—

陳 惠 貞

I. 目的

「自己学習」・「生涯学習」の重要さが叫ばれる現代では、子どもの内発的動機づけを育てることは一層重要になってくる。なぜなら、子どもが遊びを通して自ら学習するという「自己学習」の姿勢や態度を育てれば、青少年期または大人になっても自ら目標を選び、計画を立て実行するという「大人の自己学習」ができると考えられるからである。しかしこれまで、幼児の内発的動機づけを測定しようとする試みは、本邦ではほとんど行われて来なかった。その原因は、内発的動機づけという構成概念が曖昧であることと操作的に定義されにくかったことにあると考えられる。さらに、内発的動機づけという内面的なものを測定することが、幼児では、極めて困難なことも一因であろう。

ところで、内発的動機づけを育てるための条件について考えてみると、乳幼児の子どもは環境要因に影響されやすいと思われる。保育園や幼稚園に通っている子どもには、いちばん身近な親はもちろん、保育者（以下保母・幼稚園教諭を保育者と通称し、親と区別する）からの指導にも大いに影響されるであろう。そこで本研究では、親と保育者の働きかけによって、子どもの行動にどのような違いが見られるかに注目し、子どもの内発的動機づけの育て方について検討する。

外的報酬は内発的動機づけに悪影響を与えるという示唆が、Deci (1971) と Lepper (1973) によってなされている。特に Lepper らは保育園の子どもを対象に実験した結果、絵を描いて外的報酬を得たことが自発的な興味で絵を描くのを妨げて、内発的動機づけを弱めてしまったと解釈している。賞や罰の効果が強すぎたり、濫用されたりすると、賞を得ること、罰を回避すること自体が子どもの目的となってしまう。そして結果として、何らかの報酬がもらえないと、学習意欲を持たなくなる。

また、競争によって子どもの学習動機を引き出す方法もある。しかしその場合には、子どもの注意の焦点は課題の中身ではなく、むしろ競争の結果つまり勝つか負けるかにしばられてしまう。特に遂行の低い子どもの自己概念にとっては、競争的目標構造は阻害的であると Ames (1984) が指摘した。そして、常に競争に負ける子どもは、ますます学習動機を低下させる恐れがある。

さらに、強制することによっても、子どもの学習動機を抑える恐れがあると考えられる。強制というものに対応する「自由」について、Montessori (1964) は、自由の概念を取り上げ、自由とは生命の尊重であるとした。さらに、生命は活動するものであるから、規制されることなく、自由に活動させるべきであると主張した。

以上のように、賞罰・競争・強制は、子どもの内発的動機づけを妨害すると予測され、ひいては「生涯学習」や「自己学習」を育てるための阻害要因になると考えられる。そこで本研究の目的は、親と保育者による賞罰・競争・強制の働きかけと、子どもの内発的動機づけの関係について明らかにすることである。研究1では調査的方法によって、主に親の働きかけと子どもの内発的動機づけの関係に接近することを試みた。ただし研究1での内発的動機づけは、親や保育者の評定に基づいたものである。研究2では、実験場面を設定し、保育者が実際に、賞罰・競争・強制といった働きかけをすることによって、子どもが示す内発的動機づけにどのような差異が見られるかを検討した。

II. 研究1

＜目的＞ 1. 親が、子どもの内発的動機づけの育成にかかわると思われる賞罰・競争・強制の働きかけを、日頃どの程度行っているかを測定するための尺度を検討する。2. 親の働きかけと子どもの特性的内発的動機づけ傾向との関係を検討する。仮説としては、日頃から賞罰・競争・強制といった親からの働きかけが多い子どもでは特性的な内発的動機づけが低いであろうと考えられる。

＜方法＞ 日頃の親の働きかけおよび子どもの特性的内発的動機づけ傾向を測定するために、子どもの親に対して質問紙調査を実施した。被調査者は保育園園児199名と幼稚園園児616名の親であり、計815名であった。そのうちの643名分が回収された。質問紙は、賞罰・競争・強制に関する親の日常の働きかけを尋ねる24項目と、子どもの特性的内発的動機づけ傾向に関する5項目（好奇心、根気、持続性、競争心、自主性）からなる。なお、643名のうち75名分については、特性的内発的動機づけ傾向に関する以上の5項目に「常に承認をもとめようとする」をつけ加えた6項目を、保育者からも評定してもらった。

〈結果と考察〉 賞罰・競争・強制の働きかけを測定する尺度の内容を検討した結果、ある程度の因子的妥当性を持つ尺度と考えるとよいと思われた。この尺度は、幼児の内発的動機づけの育成に関係する親の働きかけを測定しようと試みたものであるが、このような観点から親の幼児に対する働きかけを扱った尺度は、これまで少なかった。今後、測定尺度の信頼性・妥当性をさらに検討し、尺度を洗練させて行くことが必要である。また尺度得点を見ると、親たちは賞罰・競争・強制による働きかけを、日頃あまり積極的にはしないようである。しかしその中では、「強制」的な働きかけが比較的多かった。さらに親たちは、子どもを「励ます」という働きかけを比較的好くするようであるが、それは「ごほうび」など「物質的な報酬」を与えることとは違う意味を持っている。親の働きかけと子どもの特性の関係では、統計的な有意性は示されなかったものの、親による賞罰や競争の働きかけが多いと、子どもの自発性や持続性が阻害される傾向があることが示唆された。

Ⅲ. 研究 2

〈目的〉 保育者の賞罰・競争・強制という3つの働きかけが、子どもの内発的動機づけにどのような影響を与えるのかについて探索的に検討する。

〈方法〉 被験者は、4才児24名と5才児の75名の合計99名であった。実験は全部で3試行から構成された。保育者が子どもに対して、賞罰・競争・強制のそれぞれの働きかけによって課題の遂行を促し、一定時間課題を遂行させた後、自由遊び場を設けて課題で遊ばせる。そして、自由遊び場面において子どもが課題を繰り返して遊ぶ時間を記録し、その時間を3条件で比較した。

〈結果と考察〉 自由遊び場面での課題遂行時間について、賞罰・競争・強制の3条件による差異を確認するため分散分析を実施したが、賞罰・競争・強制の3条件の主効果は認められなかった。しかし度数分布を検討してみると、設定した時間の終わりまで課題をしつづけた子どもが、強制条件においてやや多いようであった。さらに自由遊び場面での課題遂行時間について、2(性)×2(年齢)の分散分析を実施した結果、性の主効果が認められた。つまり賞罰・強制に関する保育者の働きかけは、

女兒よりも男児の内発的動機づけをより強く抑制する傾向にあることが示された。また、年齢の主効果も認められ、競争の働きかけによって、4才児よりも5才児の方がより強く内発的動機づけを抑制される可能性があることが示された。この結果から、賞罰・競争・強制の3条件が内発的動機づけを抑制する過程には、子どもの性や年齢などの要因が関係していることが明らかになった。

また、親の働きかけの各下位尺度得点(賞罰・競争・強制)の高群と低群によって、課題遂行時間に差が見られるかどうかを検討したが、すべてにおいて有意差がみられなかった。ここで、親の働きかけ得点は日頃のレベルのものであり、保育者の働きかけは一時的な実験的操作であって、その両者を関連づけようとするには操作上の問題があったと思われる。さらに、実験中、子どもの仲間意識・ライバル意識の効果も働くため、その影響があったのかもしれない。今後、この点について十分検討したうえで、より厳密に方法を計画し、再検討をしたい。

Ⅳ. 総合考察

本研究では、子どもの内発的動機づけを育てるための親と保育者の働きかけ方について検討した。研究1からは、親による賞罰や競争の働きかけが多いと、子どもの自発性や持続性が阻害される傾向にあることが示唆された。ただしこの結果には統計的有意性が示されておらず、再検討の必要がある。また、研究2からは、賞罰・競争・強制の3条件が子どもの内発的動機づけを抑制する過程には、子どもの性や年齢などの要因が関係することが明らかとなった。

本研究では、賞罰・競争・強制の3条件が子どもの内発的動機づけを阻害する要因ではないかと想定し、調査と実験を通して検討してきた。しかし日常生活では、それらの働きかけを完全に排除することは難しいと思われる。従って、それらを外発的動機づけの促進要因として取り除こうとするだけでなく、内発的動機づけを高める手段の中で有効に利用することも考えるべきであろう。今後の課題は、賞罰・競争・強制の内発的動機づけに対する阻害的な側面だけでなく、促進的側面も考えてみることである。